

酪農・蔬菜生産地帯における肉牛生産の諸問題

Ⅲ 牡犢センターの事例考察

来 米 速 水

(1) 南牧村の牡犢センター

八ヶ岳農協連合会に勤務する井出氏（ポップ牛乳の工場長）がセンターの経営者である。補助金を受ける関係で名目的には南牧村農協の所有になっているが実質的には井出氏一家（特に長男夫婦と井出氏の奥さんが専門的に従事している）の経営である。雇用労働力を全く入れない完全な家族経営である。農地の所有状況をみると畑4haと水田20aの計4.2haの経営である。しかし宅地が広く30aもある。水田からは年間15俵の収穫を得ており、これはすべて自家消費にあてられる。畑の利用状況をみるとコーンの栽培が1.2ha、960トン（年1回収穫）、それにクローバーやチモシーを主体とする牧草栽培が2.8ha、2,040トン（年3回収穫）となっている。これはすべて自家用（肉牛の飼料）に向けられている。牛舎用の敷地（宅地分）は井出氏の所有であり、牛舎は農協所有となっている。現在の飼養頭数をみると次の通りである。①牝犢（small つまり生後10日位のいわゆる“ヌレ子”を酪農家から購入し、それを約5～6ヶ月保育して出荷する）45頭、②育成牛（6ヶ月保育の乳仔牛、つまり素牛を導入して約14～5ヶ月肥牛して出荷するもの）80頭（その内73頭は牡で7頭が牝である）、③搾乳牛（ホルスタイン）40頭となっている。肥育の一貫経営（aとb）と酪農経営の二本立てである。牛の市場価格は変動がいちじるしく、バクチ農業といわれるように経営収支は極めて不安定である。しかし現状から概観するとヌレ子の価格は1頭当り平均6～7万円円で農協及び家畜商を通じて導入している。6ヶ月後の出荷時の価格は1頭当り約17万円である。井出さんは年間約200頭の出荷であり、飼料代等の経費を控除した所得率は約3分の1程度である。この素牛価格は生体重（kg当り）で相場が立てられる。そのため素牛生産者は濃厚飼料を多給して体重の増加をはかる傾向に進む。

逆にそれを購入する肥育経営では濃厚飼料を多給した牛ではその後の肥育成果があがらないと云う矛盾が生じている。次に育成についてみると去勢牛（♂）が主体であるが牝もその対象となっており、育成牛の経過によっては、乳牛（繁殖牛）に廻せるようなものも出るようである。素牛価格17万円に対して14ヶ月後の出荷価格は約50～60万円である。井出さんが給与する飼料代をみると1ヶ月約1万5000円となっているのでこの間の飼料費は約21万円となる。これに素牛価格17万円を加えると38万円となる。これに光熱費や施設の償却費等を加えるとさほど大きな収益は期待できないようである。大雑把にみて1頭当り10万円前後の収益とみられる。

したがって副業でも10頭以上飼育しないと採算がとれないようである。酪農経営は極めて良好であって、全般的な調整段階においても、ここでは農協の連合会が牛乳の処理工場をもって、直接スーパー等に販売しているため、むしろ酪農経営はまだ若干発展する余地がある。井出さんは35～40頭位を常時搾乳しているが、年間搾乳量は約13万kgで販売金額は約1,300万円。これは全量農協の加工場に出荷している。所得率は約2分の1とみられる。乳牛の更新については年間約5～6頭を入れかえており、北海道から導入するはらみ牛（8～9ヶ月）の価格と廃用牛価格との差額は15万円程度の支払いとなる。以上が概要であるが、以下付随した諸問題を取りあげてみよう。

まず資本装備であるが、寒冷地であるため相当の投資が必要である。井出さんは48年当時建設した牡犢センターに2,200万円（自己資金1,100万円、近代化資金1,100万円）、搾乳牛舎に800万円を投下している。さらにサイレージ（simplex 大）に500万円（54年）、同じくsimplex 小に450万円（55年）。トラクターに350万円（52年、28馬力）も投下しているだけでなく、トラック（2トン）3台、バルク・クーラー、バーン・クリーナー、パイプラインミルカー等の施設にも資金を投下している。次に飼料について述べてみよう。井出さんは自給率は30%と云っている。まず牡犢用としては特A（保育ミルク）、モレットA、キング前期等を購入している。稲ワラについては約15の農家を対象に自家用堆肥と交換している。交換率は2トン車1台分の堆肥とワラ約70～80把との交換である（これを販売すれば約1万円である）。次に搾乳牛と育成牛用としては、配合14、ビートパルプ、粉碎小麦、フスマ、アッペン、キング後期等を主体とし、それにトマトとリンゴ粕（これは運賃のみで無料、年間運賃40～50万円）を給与している。

このように単味中心の配合方式と粕利用によって成果をあげている。ところで寒冷な気候が肉牛に与える影響は見逃すことができない。本年の寒さで肥育牛の出荷予定日が大巾に狂ったため、素牛が余るという現象が発生している。井出さんの経営は酪農よりも肉牛の保育と肥育が主体である。肉牛経営の最大の問題点は価格が極めて不安定であるという点である。

そこで長野県では農協と業者が協力して佐久地区に食肉センターを設置（57年完成予定）することになっている。

さらに、農協連合会では連合会の古くなった牛乳工場を利用して加工施設を導入し、カット肉にしてスーパー等に販売したいと云っている。これらの措置は云うまでもなく、肉牛価格の安定化をはかるためのものである。肉牛の流通については大巾に農協（特に経済連）が乗り出しており、家畜商が押され気味である。したがって、各部門において流通の近代化は除々に進んでいるようである。さらに井出さんは育成牛を増加する方針であるが、一番問題になる点は肥育技術がまだ未熟であるため、効率が低いことである。広い意味の経営指導が要求される。